

平成 19 年 3 月

春の到来

所長 稲垣 一則

今年の冬は暖冬といわれ、そのまま春に入り桜も例年になく早い開花予想が出ていましたが、3月の中旬から結構強烈な「寒の戻り」があり結局何事も辻褄が合ってくるのか、と妙に感心したりしています。

毎年3月の大阪の風物詩は「大相撲春場所」。今年も確定申告の最終日3月15日に行ってきました。会場の大阪府立体育館に近づくにつれ聞こえてくる相撲太鼓の音、力士の名を記した幟の並び立つ風景をもうかれこれ10年は見続けています。数年前まで2階席は殆ど空席だったものが、2年ほど前からは半分ほどは埋まるようにはなってきました。若・貴華やかかりし時は超満員であったことを思い起こせば隔世の感がありますが、それでも景気が戻ってきたということなののでしょうか。こうしたところにも世相を反映しているようです。

肝心の相撲の方は、既に白鵬の優勝で幕を閉じたが、八百長疑惑の渦中にある横綱朝青龍の初日からの連敗に始まる波乱の場所。ただ、行った5日目は番狂わせもなく順当な結果の一日でした。人気があるのは何といても高見盛。土俵を見ていると突然ドタドタと音が聞こえ、何のことやらと思えば振り返ると高見盛の入場する足音。そんなに力をいれて歩かなくとも・・・、といっても本人は至って真面目。立会い前のあの面白い仕草も本人にとっては集中する方法なのでしょう。

あと、今後注目すべき力士として、十両の里山、幕内下位の鶴竜。また今後多くの関取を輩出するであろうと思われるのは、元横綱北勝海（ほくとううみ）率いる「八角部屋」。幕内にはひとりも関取がないものの、十両から幕下上位にかけて8人も番付にのっている。外国人力士が目立つ昨今であるが、以前幕内の3分の1を占めていた二子山部屋も、若貴引退とともに今は見る影もなし。「おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし」とうたわれた栄枯盛衰が常としても、生真面目な取り口が特徴の現役当時の師匠の相撲そのままに、「真面目に一生懸命に努力すること」が報われるよう期待したいものである。